

黄門桜五十年

匠 探 訪

191

黄門桜が広く知られるようになったのは40年ほど前、昭和50年代後半からと記憶しています。

それ以前から周辺地域で黄門桜と呼ばれていた古木が枯れてしまうのではないかと心配がありました。そうした中、保存を願う飯高寺関係者が同寺文書から黄門桜に関する記載を見つけ、1973(昭和48)年天然記念物として市文化財の

指定を受け、保存対策が取られました。保存処理の痕跡は幹の部分に見られます。

1975(昭和50)年に飯高寺建造物含む境内が千葉県指定文化財、講堂など4棟は1980年国重要文化財となりました。これをきっかけに来訪者も多くなり、飯高檀林跡の説明に黄門桜も加えられました。

黄門桜の由来については、何度かこの欄で紹介しましたが、1803(享和3)年の飯高寺文書にこう書かれています。

「水戸黄門様より御意にて下総国佐原(現在の香取市佐原)より飯高檀林まで並木として松

桜植えられ」とあり、1699(元禄12)年春、

のこととされます。それではいったい誰が植えたのでしょうか。

1966(昭和41)年発行の『佐原市史』に興味深い記載が見られます。「水戸黄門様飯高檀林御参詣記」に、佐原の伊能権之丞が御意を受け、佐原村から飯高村までの沿道30カ村に植樹を依頼したことが由来とされています。飯高・妙福寺境内にも昭和から平成の代替わり頃まで「黄門お手植えの梅」が存在していました。

飯高寺の記録発見と『佐原市史』発行から50年余りの間に調査も進み、水戸黄門の下総飯高佐原への1698(元禄11)年と翌年の来訪は実現していないことも分かりました。それでも黄門桜の50年を振り返るとき、佐原の伊能権之丞と保存に尽くした飯高地区の功労者はこれからも語り継がれることでしょう。

(市文化財審議会委員・

依知川雅一)

問 秘書課広報広聴班

☎ 73・0080



市指定文化財の黄門桜